『幼児の教育』と私

新世紀に迎えた第百巻

―その中のひとこま―

村田　修子

新世紀に迎えた第百巻　おめでとうございます。

現在は、長い間かかわって楽しい日を過ごした幼児の世界とかけ離れた環境に居りますが、新世紀を迎えたこの年に、切っても切れない関係を持っていた『幼児の教育』が同じように第百巻になったということは、とても意義深いことでとてもうれしいことです。周りを見回しても百巻を迎えた本はそうざらには無いと思うからです。

『幼児の教育』の前は『婦人と子ども』の題名で明治三十四年に創刊されましたが、私が

この本を身近なものとして知ったのは、昭和二十一年（第四十五巻）の第一号で、表紙は白地に明るい茶色で羽を広げた一羽の鳩が描かれていました。戦後の物の乏しい時期でしたから薄い紙で三十二頁位の一冊はかさのないものでした。でも私にとってはこの一冊がとても印象深い本なのです。

学生時代幼稚園の隣りの校舎に四年間生活して居たというのに、自分のことに精いっぱいだった為か幼稚園のあったことも建物なども全然目に入っていなかったのです。その私が先生の養成を看板にしている学校（今は大学）への就職をことわって幼稚園に勤めたのは、学生の時代に人間というものを一番考えさせて下さった倉橋先生のお授業があったことからで、幼児の世界にとび込みました。一人っ子で育った上にまわりにも子どもが少なかったので本当に子どものことは何も知りませんでした。

先生は園長室に居られることは少なかったのですが、時折り一緒に会食をしながらお話しがはずむのでした。何気ないお話しの中に大切なことが語られました。それに独特のウィットをまぜながらのお話しで新米の私にとっては感じさせて頂くことがたくさんありました。これは時がたってから「教育の自然の型」とはこういうものなのではないかと思いましたし、子どもに接する基本的な型と思うことになったような気がします。

特別な用事のあるときは御自身で保育室に出向かれて用件をおっしゃっていました。この一年目の秋、『幼児の教育』に運動会のことを書くようにと園庭でいわれました。勿論

この雑誌についていろいろなことを知りませんでしたし、それよりもまだ子どものことがよく分からないときでしたから、文章を書くということなど考えてもみなかったことだったので必死におことわりしました。けれど、先生は次々と運動会のことや幼児のこと、その心得やヒントなどなど、いろいろなお話しをして下さいました。その結果私は、「幼稚園の運動会」という題名の文章を書くことになってしまいました。

今回これを書くにあたって改めてその時の記事を開いてみました。子どもにふれて半年位たったばかりの者が書いたものとしては割合にいろいろな面のことが掲げられているのですが、私としては今でもこれは倉橋先生に書いて頂いたような気がして恥かしい思いがしています。先生は多分「僕が言ったことを書いただけのこと……」と思われたことでしょうが、幼稚園の一年生先生と思われて話して下さったことと思っています。そのとき行った種目のかけっこについては大変ほめて下さいました。戦後の何もないときやっと探した小さなキューピーと鈴を自分達で好きなようにはり絵をした白い袋に入れてぶらさげておき、それを走って行って取るだけのことでしたが、先生は「目標に向かって走って行くというのはいいですね」と救いを出して下さったのも有難いことだったと感謝したもの

でした。

倉橋先生とのふれ合いのことで終始してしまいそうですが、これを機会にこの表紙にある第一巻から変化があったと思われる年代の時期の本を見せて頂きました。このように長い期間のものを順次見てゆきますと、月ごとに見ていたときとは違って流れが見えて面白いと思いました。例えば『婦人と子ども』の題名の時は大体三十二頁で、全体的に幼稚園というものを紹介しているようなところや、他の養成所の募集広告があったり、女学校などの移転や消息などもあって、大変おおらかでゆったりとしている感じがしました。その後講習会なども行われるようになってその紹介とか、歌や保育の内容なども順次のせられています。

一番変化があったと思われる戦時中（昭和十七年、第四十二巻以後）は「国防国家の幼児教育・戦時国民幼稚園」という副題があって、大体二十頁程の長さに納められています。

戦後は新しい憲法・教育基本法・学校教育法及びそれ等の解説や、前の時代には倉橋先生が余り表にお出しにならなかった子どもに対する考え方などが、水を得たように展開されていて懐かしく思いました。

忘れかけていたこの本を「改めて見てみよう」という気持ちにならせて頂いたことだけでも、半世紀を共に過ごした私としてはとてもよかったと思っています。

（元お茶の水女子大学附属幼稚園・洗足学園短期大学並に附属幼稚園）